

梶  
浦  
由  
記



『炎』<sup>ほむじ</sup>も、それ以外の曲も、同じようにいいとおしい。

Y U K I

K A J I U R A

作曲家



## 音楽好きの父から学んだ 音楽の多様な楽しみ方

子どものころから歌うことが大好きでした。親から「あなたは話すより先に歌っていた」と言われるほど(笑)。その背景には、オペラやドイツ歌曲をこよなく愛した父の存在があります。幼稚園生になったばかりの私をピアノ教室に入れたのも父でした。ちょっと弾けるようになると、父は私に伴奏をするよう促し、気持ちよさそうにオペラを歌っていたものです。ひいき目なしに、父は歌が上手だったこともあり、私も伴奏することを心から楽しんでいました。「音楽は聴くだけでなく、自分で奏でたり、歌ったり、自由につくったりしてもいいんだ!」ということ、音楽を愛する父の姿からごく自然に学んだように思います。また、父の仕事の関係で、小3から中2までをドイツで過ごしたことも、私の音楽好きに影響していると思います。小中一貫の日本人学校では、6年間ずっと合唱部で毎日歌っていたし、月に1度、町にある小さなオペラハウスに家族で出かけることが、当時の私の大きな楽しみでしたから。

## 「音楽に国境はない」と知った 音楽祭でのハプニング

いつの時代を切り取っても、私は素敵な先生に恵まれていました。中でも、日本人学校で合唱部の顧問をされていた浅野先生は、特に印象に残っています。若い男の先生で、きれいなテナーボイスの持ち主で、歌もうまくて、何よりイケメン! 合唱部女子の憧れの存在でした。もちろん合唱部の活動にも熱心で、私たちをドイツ内外のさまざまな音楽祭に参加させてくださいました。

ある音楽祭に出向いたときのこと。控え室での待ち時間が長く、退屈した日本人学校の子どもたちが勝手に『蛍の光』を歌いだしたことがあるんです。すると、同じ控え室にいた13か国の子どもたちが、同じメロディに自国の言葉をのせて次々に歌いだしました。『蛍の光』がスコットランド民謡であることを知らなかった私は「どうしてみんな歌えるの?」と驚きつつ、高揚感に包まれたことを今でもはっきりと覚えています。ついさっきまで、異なる国ごとで分かれ、お互い見向きもしていなかったのに、1つの音楽のもとで全員が1つになり笑顔になってしまうという、感動的な体験でした。よく「音楽に国境はない」



と言いますが、それを実体験させてくださった浅野先生には、今も心から感謝しています。

## 私がつくった曲はすべて 私の子どものような存在

日本に帰国後は都立高校に進学し、合唱部とロック部に籍を置いていました。大学時代は女の子だけでバンドを組み、キーボードを担当。私が書いた曲をバンドメンバーに演奏してもらえることがうれしくて楽しくて仕方がない毎日でした。大学卒業後は一般企業に就職しましたが、バンド活動も続けていたんです。そして、数年が過ぎたころ、ある方から「プロにならないか?」とお声をかけをいただき、それが転機になりました。でも「会社員として堅実に生きてほうがいいのでは?」との思いもありました。その迷いを断ち切れたのも、実は父のおかげなんです。父は私が20歳になる前に病気で亡くなりました。音楽を愛し、3か国語を自在に操り、仕事にも熱心で、娘の私から見ても「立派な人」だった父。そんな父の死を通して私は「毎日を真面目に懸命に生きていても、人はいつ死んでしまうかわからない。それなら好きなことをやろう!」と思うことができました。それで27歳のときにバンドとしてデビューしました。

その後、紆余曲折ありましたが、少しずつアニメやゲームなどのBGMをつくるお仕事いただけるようになり、今に至ります。これまでに相当数の曲をつくらせていた

だいていますが、どの曲も私の子どものような存在なので、世間の評価に関係なく、どの子も同じようにいとおしいですね。

## 劇場版『鬼滅の刃』無限列車編 主題歌『炎』の制作秘話

去年は、劇場版『鬼滅の刃』無限列車編の主題歌『炎(ほむら)』を作曲させていただきました。歌詞はLiSAさんとの共作です。主題歌やBGMを書くことは、私にとって、原作や脚本の読書感想文を書くのと同じなんです。読んだ後の自分の気持ちをそのまま音で表現すれば、聴いてくださる人の心にも届く。いつも、そんな思いで作曲に臨んでいます。そういう意味では『炎』も「最後のシーン



2019年の「Yuki Kajjura LIVE TOUR vol.#15」でピアノを弾く梶浦さん。「新型コロナウイルスの影響で思うようにライブができませんが、近いうちに必ずライブでしか得られない『幸せ』を皆さんと一緒に味わいたいです!」(梶浦さん談)

がこれなら、この音」という明確なイメージがあったので、作曲にはあまり苦労しませんでした。一方、作詞には苦労しました。というのも、私は大切な人を亡くしたときに「悲しみ」以外に何もないので、ひたすら悲しい歌詞になってしまうんです。去り逝く人が、残される者たちと与えてくれた大切な何かを、歌詞に込めるべきだとわかっていても、それが私には難しく。それでLiSAさんに委ねたところ、LiSAさんが見事なまでに、勇気や生きる力がこもった前向きな言葉を曲にのせてくださり、『炎』が完成しました。

音楽制作は私にとって「幸せ」そのもの。頭の中に生まれた音のかけらが、曲として完成したときの幸せ。その曲を、素晴らしい奏者や歌手の皆さんが感動的に表現してくださる幸せ。すべてが融合し、自分が想像した以上の壮大な世界感を堪能する幸せ。生みの苦しみは付き物ですが、その先に、何物にも代えがたい幸せがあるとわかっている、この仕事は一生やめられません!

## 梶浦由記 (かじうら・ゆき)

1965年生まれ、東京都出身。作曲家でありながら、作詞や編曲も手掛ける。1993年、See-Sawのコンポーザー兼キーボディストとしてデビュー。現在はアニメを中心とした劇伴音楽の制作に携わる。『鬼滅の刃』、『ソードアート・オンライン』、『魔法少女まどか☆マギカ』等、話題のアニメ作品の劇伴音楽を担当。ほかにも、映画『アキレスと亀』(監督:北野武/主演:ビートたけし)、NHK歴史番組『歴史秘話ヒストリア』、NHK連続テレビ小説『花子とアン』などの音楽も手掛け、ジャンルを問わず活躍。2020年の第62回日本レコード大賞では、『炎』(歌:LiSA/作詞:梶浦由記・LiSA/作曲:梶浦由記)が日本レコード大賞を受賞。



わたしのイチオシ!

クイズ(P36)正解者の中から抽選で1名様に、梶浦由記さんオススメ、マリアージュフレールの「フレンチ ブラックファーストティー®」ほか詰め合わせをプレゼントします。ふるってご応募ください!

## わたしの心にある風景



Deutsche Oper am Rhein(ライン・ドイツ・オペラハウス)の外観(梶浦氏撮影)

## 【思い出のオペラハウス】

ドイツに限らず、ヨーロッパでは、人々の生活の延長線上にオペラやクラシック音楽があるんです。小さくても立派なオペラハウスが生活圏内にあり、良席にこだわらなければ手頃な料金で本物の歌や音楽に触れることができます。写真は、私が子どものころに家族でよく足を運んでいたオペラハウス。席に着き、絨帳の下から光が漏れているのを見ると、「これから始まる!」って実感が湧いてきて、興奮して座ってられないほどでした(笑)。幕が開くのをワクワクしながら待つ子どものころの私に応えたいという思いで、音楽制作に取り組んでいます。